



## 本條秀太郎の会

# 「端唄／＼江戸を聞く／＼」 「行く雁に」

去る10月24日、東京・紀尾井ホールにて本條秀太郎の会「端唄／＼江戸を聞く／＼」の第34回目が催された。

いつもながら、静寂のうちに幕が開き、舞台中央に座る本條が、これも静かに曲を奏で、歌う。その佇まいから、端整な演奏、伸びやかな声と、いつものように会場に響き渡る。客たちは、そこに身を浸すことになる。

この「端唄」だけでなく、「俚奏楽」「鄙哥」もそうなのだが、音や声を聞かせるだけでなく、その「間」、つまりは「無音」の時間もまた演奏であり、唄であると感じさせられる。そのことに気づくと、本條の奏でる三味線の音の一つ一つが、ま

た味わい深くなくなっていくから不思議である。

今回は三部構成。第一部が、淡々と端唄を重ねていき、そこから醸し出される雰囲気を楽しむ時間。「萩の花妻」にはじまり、「しよんがいな」「秋の夜長」などが歌われた。

第二部は、浮世節の「たぬき」。本條秀太郎と秀五郎とが掛け合いのような三味線演奏を聞かせてくれた。

そして、三部は端唄組曲「萩の声」ではじまる、さまざまタイプの端唄の数々が並ぶ。「さのさ節」「米山甚句」「二上り新内」といった曲を聞くと、端唄そのものの間口の広さを感じさせられた。